

新しい年に

理事長 有馬真喜子

2017年、新しい年を迎えました。今年も一緒に歩みを進めて参りましょう。どうぞよろしくお願い申し上げます。

UN Women は、設立7年目を迎えたことになり、日本国内委員会である（特）国連ウィメン日本協会も同じ年を数えることになります。

UN Women は、いま国連の最大の目標であるSDGs、持続可能な開発目標、中でもその5番目の目標に挙げられている「ジェンダー平等」の実現に力を入れています。具体的内容は、引き続き、女性のリーダーシップと参画、経済的エンパワーメント、女性や少女に対する暴力の撤廃などですが、取り組みはより広がりを見せつつあります。アメリカ、フランス、ドイツ、オーストラリアなど世界に14ある私たちの仲間、国内委員会も同じ歩みを進めています。昨年はオランダが国内委員会を設立し、新しい仲間に加わりました。

今年、2017年は、「激動」の年といわれています。世界中のいたるところで価値観が大きく揺らぎ、不安定さが醸し出される年ともいわれています。大きな流れは、グローバル化から、自国第一の内向きへ、です。“グローバル疲れ”などという言葉も聞こえてきますし、他方、世界から格差を無くそうという理想主義が、結局格差を助長したことへの失望も語られています。

このことは「国連」への期待にも大きな変化を生んでいます。昨年12月に行われた日本の国連加盟60周年式典は、加盟50周年の時の楽観主義とは程遠い色調でした。「歩みと展望」を考えるパネルは、日本を含む各国で、国連への信頼が薄れているとの率直な認識から始まりました。ことに日本の国連への期待は急速に減少しており、2016年のヤフーの調査では、「国連は意味がない」と答えた人が3分の2にのぼり、「意味がある」との回答は4分の1に過ぎなかったと報告されました。

しかし議論では同時に、
とは言いながら、平和や普遍的
人権や持続可能な開発
について、国を超えて議論
し、国際基準をつくり、行
動するのは、結局国連以外
にないことも

再確認されました。“不完全だが不可欠”との、明石康・元国連事務次長の言葉に、大きな共感が広がっていました。

女性の課題についても同様でしょう。世界の女性や少女の置かれている状態を改善するために、UN Womenの果たすべき役割はやはり大きいのです。昨年12月、日本政府が主催した国際女性会議におけるスピーチで、ヌカカ事務局長は、これまでのUN Womenの活動分野に加え、スポーツを通じての女性のエンパワーメントをあげ、広がり的重要性を強調しました。

国連ウィメン日本協会では、2020年の東京オリンピック・パラリンピック開催もあり、スポーツや健康の分野での協力にも力を入れて行きたいと考えています。スポーツ庁の国際協力のコンソーシアムにも加盟しました。

また、変化する時代の中で、より大きな役割を果たすために、私たち自身の組織のありようを見直す活動も始めました。幸い、国際的に著名なコンサルタント会社が、プロボノで、見直しを行って下さっている最中です。

時代の動きを慨嘆しているだけでは何も生まれません。時代に敏感になり、希望をどう作り出してゆくのか、女性の志が問われている時とも言えましょう。



テーマ「災害と女性」

2016年も世界で自然災害が多発。人々の生活を崩壊させ、復興が進まない状況下、女性が二重の災害リスクを負うと指摘されています。今号では、国連ウィメンの重要課題のひとつにも取り上げられている「災害と女性」をテーマに、災害下での女性の権利リスク、ジェンダー視点の救援／支援活動、復興運営への女性の参画など、世界で議論が展開されているその一端をご紹介します。

世界津波の日制定記念シンポジウム

理事 田中由美子

11月5日は世界津波の日です。津波の日の制定は日本をはじめとする加盟国の提唱により第70回国連総会本会議で採択されました（2015年12月）。第3回国連世界防災会議で採択された仙台防災枠組（2015～2030）及び持続的な開発のための2030アジェンダ（SDGs）の実現をめざし、津波をはじめとして世界中で災害リスク削減に対する関心が高まることが期待されています。

世界津波の日は、大津波から多くの人命を救った和歌山県の「稲むらの火」に由来しています。これは1854年11月5日に起きた安政南海大地震で、津波を早く察知した村人が自分の大切な稲束に火をつけ多くの村人を高台に避難させて命を救ったという逸話です。

この日を記念し、東京でも「世界津波の日制定記念国際シンポジウム－多様な人々が参加するレジリエントな復興をめざして」が開催されました（10月27日）。シンポジウムでは、特に災害リスク削減をジェンダーや多様性の視点からとらえ直し、東日本大震災の経験も交えて、課題、現状、改善のあり方、国際的な取組について議論がおこなわれました。また、シンポジウムに先駆け、国内外の被災地で活動する市民団体、研究者、実務者が、宮城県の被災地を訪問し意見交換を行いました。

シンポジウムは、有志による実行委員会（堂本暁子代表）のほか、市民団体や世界銀行、JICAなどが共催し、ジェンダー視点に立った災害復興支援を応援している国連ウィメン日本協会も後援しました。海外からはフィリピン、ネパール、インド、世界銀行などのパネリストが、草の根の災害予防、女性や多様な人々の視点に立った避難所運営や復興住宅建設、被災した地域の再興などについて発表しました。災害への対応能力が高くレジリエント（復元力のある）で、より平等かつ持続可能な社会をめざすためには、女性や若者、障害者など多様な人々が災害予防・復興など全ての政策やその実現のための制度作りや活動に幅広く参画していくことが不可欠です。

（シンポジウムのサイト）

<http://jwndrr.org/allnews/report/1295/>



ネパールで復興住宅再建をする女性たち

提供：ルマンティ・ジョシ（Lumanti Support Program for Shelter）

防災にジェンダー課題の主流化を！

理事 三輪敦子

2016年5月16日（月）～18日（水）にかけて、ベトナムのハノイで開催された「ジェンダーと防災アジア太平洋地域会議（Regional Asia-Pacific Conference on Gender and Disaster Risk Reduction）」に参加しました。この会議は、日本政府が支援し、UN Womenベトナム事務所とベトナム政府防災管理中央運営委員会の共催により開催されました。田中理事のご尽力により、国連ウィメン日本協会として参加の機会を得ることができました。

会議の目的は、2015年の国連仙台防災会議で採択された「仙台防災枠組」の実施にあたり、ジェンダーの視点が反映されるよう具体的な方策を議論することでした。ベトナムとアジア太平洋地域の22カ国の政府、国連、国際／地域NGO、研究者等、300名ほどが参加する盛大な会議でした。日本からも、「男女共同参画と災害・復興ネットワーク」の大野曜事務局長が東日本大震災後の日本の経験を報告された他、JICAが支援するスリランカとフィリピンの事例が紹介されました。

最終日には、出席者により「ジェンダーと防災に関するハノイ行動提案（Ha Noi Recommendations for Action on Gender and DRR）」が採択されました。ハノイ行動提案は、仙台防災枠組を実施する際のジェンダー指針として、今後の議論と計画に反映されることになっています。グループ会合での議論を通じて行動提案の草案が作成されるなど、参加型のプロセスにより、参加者が「行動提案」の実施に真剣に取り組むための努力がおこなわれていたことが印象的でした。

会議終了翌日には、ハノイから車で3時間ほどの場所にあるYen Bai地域へのフィールドトリップに参加し、災害リスクを軽減するために生産を多角化し、養蚕や、うさぎの飼育をおこなっている農家の女性から話を聞くことができました。また、ベトナム女性同盟の女性たちは、防災啓発のために村で実施している劇を演じてくれました。



ジェンダーと防災アジア太平洋地域会議のセッション風景
右から2番目は「男女共同参画と災害・復興ネットワーク」の大野曜事務局長

応援メッセージ 災害と女性

男女共同参画と災害・復興ネットワーク代表
堂本暁子

国連ウィメン日本協会の会報で、「災害と女性」を取り上げてくださったことに敬意を表します。心強い限りです。

2011年3月11日の東日本大震災から約6年が過ぎました。振り返ってみると、当初、被災地を訪れて驚いたのは、多くの女性が困難に直面していることでした。その原因は、避難所運営などが男性主導で行われ、意思決定の場に女性がほとんど参加していないことにありました。

そこで、全国の女性団体に呼びかけて立ち上げたのが「男女共同参画と災害・復興ネットワーク」です。また多くの女性団体が、同時多発的に女性の視点・多様性の視点を復興政策に盛り込むよう、政府に訴え続けました。その結果、災害対策基本法や、東日本復興基本法などに、男女共同参画と多様性の視点が書き込まれ、内閣府においても、災害時における取組指針が作成されるなど、少なからず成果を上げることが出来たといえます。

また、2015年に仙台で開かれた第3回国連防災世界会議で採択された「仙台防災枠組」においても、世界の女性たちが協力・連携し、ジェンダーの重要性、さらにはリーダーとしての女性の役割を明記させることが出来ました。

しかし、今、東日本大震災の復興状況を見ると、私たちが、声を大にして主張してきた女性や障害者、高齢者や子どもなど、生活者の視点が必ずしも復興後の都市計画や災害住宅に反映されているとは言えないのです。また、国の法律に記載された内容が、全国の自治体や地域にくまなく浸透しているとも言えません。

日本は豊かな自然に恵まれ、昔から、自然との調和を大事にしてきましたが、一方で、地震、津波、台風、火山の噴火など、自然災害の多い国でもあります。と同時に、現代は災害多発時代です。私たちは、災害対策を人任せにするわけにはいきません。一人ひとりの女性が平常時から、それぞれの地域で声を上げ、積極的に活動し、災害に強い（レジリエントな）地域社会を構築することが求められています。



UN Women の「災害と女性」についての取り組み 災害とジェンダーとの関係

2016年8月18日 Aleta Miller (UN Women Fiji)

世界人道デーにあたり、災害時、女性はより多くの被害を受けやすいという現実を踏まえ、災害における太平洋地域の女性の現状と対策をお伝えします。

島嶼国から成る太平洋地域は、地震・火山・洪水・津波・旱魃等自然災害が多く、バヌアツ・フィジーはこの1年半に二度サイクロンの被害を受けました。住居や作物を失い、水・食糧不足等の生活環境の悪化に加え、社会的弱者に対する家庭内暴力や性暴力・性的搾取の発生リスクも増大します。私たちは、災害時には、こうした二重の被害が発生することを認識し、そのための備えと対応について考える必要があります。世界的に女性は差別・嫌がらせ・暴力を日常的に体験していますが、災害時には、極限的状况下で社会秩序の維持が困難となるため、既存の支援事業や擁護の仕組みが損なわれないようにすることが重要です。私たちは、地域の実情やニーズを熟知している各地の女性指導者と協働し、災害への備えと対応に向けた計画立案・意思決定に彼女達の声を取り入れ、彼女達の指導力・ネットワーク・知識を強化して指導的役割を担えるようにすることが、地域住民全体の利益となります。活動への女性の参画は世界的潮流になっていますが、まだ不十分です。人道支援活動で重要なことは、被災地の現状に即した対応をとることで、最も支援の必要な人に必要なものを届けることです。女性は立ち直るのが早く、すでに変化をもたらす主体であることを認識し、女性が自分の経験・ニーズ・考えを伝えることができるよう、計画立案と意思決定に参画させる必要があると同時に、それらの情報の重要性も知るべきです。あらゆるレベルで女性が対等なパートナーになる必要があり、それを実現させるのが私たちの役割です。

(UN Womenホームページ「Disasters: What's gender got to do with it?」Aleta Millerの報告より抄訳)



抄訳：上田恵美

国連ウィメン日本協会の活動

UN Women NCミーティング 報告（ベルリン）

理事 本田敏江

10月17日～19日までベルリンで開かれたUN Women国内委員会会議に出席してきました。冒頭でオランダに国内委員会が新たに設立されたという発表がありました。これで国内委員会の数は15となり、ホテルの会議室は40人ほどの参加者でいっぱいになりました。会議は新しく戦略的パートナー部長に就任したジョエル・タンギシ氏のスピーチで幕を開けました。彼女はフランス系アメリカ人、「国境なき医師団の経験があるので理想と現実のギャップはとても良くわかります。その中で組織のミッションを達成していくにはまず組織としてうまく機能していなくてはなりません」と述べました。その手段として彼女がまず挙げたのはフラグシップイニシアティブです。小さなプログラムをバラバラにやっていたのでは成果が見えにくい、人件費も時間もかかる、それを統合して12のフラグシッププログラムにまとめたい、ということでした。

また本部と国内委員会の関係もより効果が上がるよう戦略的に見直したいと述べられました。本部からはコンサルタントも入れて9人も参加があり、国内委員会への期待が感じられました。期待はとりもなおさずファンドレイジングで成果をあげることです。今そのターゲットは企業から個人にシフトしつつあります。その中でも一度立ち上げて、ある程度のドナーを獲得してしまえば、人件費も時間もかからない月例募金に議論が集中しました。拠出金も多く、活動も活発な北欧組はいずれもこのやり方で成果をあげています。日本は寄付文化の違い、インターネットへの不信などもあり、月例募金へのハードルは高いのが実情です。ご興味のある方はぜひ国連ウィメン日本協会のウェブサイトの「寄



会議風景



ホテルのロビーで全員集合

付」から入ってその情報をご覧になってみてください。

シンポジウム

「いま期待される女性のリーダーシップとはー女性のリーダーシップで社会が変わる、社会を変えるー」

副理事長 目黒依子

国連ウィメン日本協会は、上記シンポジウム（内閣府男女共同参画推進事業）を2016年12月1日上智大学国際会議場で開催しました。これまでも女性のリーダーシップ論はありましたが、「リーダーシップに性差はあるのか」「女性のリーダーが増えると社会の何が変わるのか」についての理解は必ずしも明瞭ではありません。男女格差を量的に削減する目標と同時に、その方法論を検討することが欠かせません。不平等の弊害の専らの受け手である女性が平等促進の主体となるためのリーダーシップとは何か。

1) 開会挨拶ー有馬真喜子当協会理事長および高祖敏明上智学院理事長、2) 基調講演ー鈴木大地スポーツ庁長官「スポーツを通じた女性の活躍促進」、3) 河本宏子（株）全日本空輸取締役専務執行役員、木山啓子認定NPO法人ジェン（JEN）代表理事、三屋裕子（公財）日本バスケットボール協会会長、村木厚子前厚生労働事務次官、山口香筑波大学体育系准教授によるパネルディスカッション「私の歩んだ道ーそして未来を拓く」（コーディネーターは目黒依子副理事長）、4) 閉会挨拶ー吉川真由美理事、というプログラム構成でした。

有馬理事長のメッセージでは国連ウィメンは「ジェンダー平等の達成と女性・女児に対する暴力根絶にスポーツが果たす役割には魔法の力がある」としてスポーツ関係の国際機関とパー

トナシツを築き、スポーツ分野における平等が女性・女児のエンパワーメントにつながることを強調していることや、国際的な「スポーツ・フォー・オール」という運動の国内普及を目指すスポーツ庁の活動などが紹介され、鈴木長官からはスポーツ庁の組織体制や女性アスリートの育成・支援取り組みの概要解説と国際舞台における女性活躍の環境整備・支援方策の検討が今後の課題であるとの指摘がありました。

パネルディスカッションでは様々な分野で既にリーダー的地位を築き、女性リーダーの育成に携わっている5名のパネリストによる①「今の自分」を形成した経験・出会い・出来事・活動、②直面した重要な課題・障壁・解決方法、③女性が「真に」輝く社会を構築するための必須条件・具体策、の各トピックについて、キャリア形成過程での悩み・失望・やる気・達成感など体験に基づく生の声が語られ、息をつく間もないようなセッションでした。職種・職域や体験年齢による多様性はあるものの、全員に共通する経験とメッセージを抽出すれば、自分の置かれた状況が女だからと気づいて「それはオカシイ」と思ったら言動で主張すること、チャンスが来たら断らない、自分で決めたことには絶対に結果を出すため最大級に頑張る、自分の理解者は必ずいると思う、などは悩んだ時の決断で結果的に良かったと言えること。③についての



戦略・方法論として、女性リーダーのロールモデルを増やす、女性たちが連携して主張する時の方法を工夫する、組織や分野・領域の内部で疎まれても外部の理解・サポートは有効、など改めて納得できる提案がありました。

主催：内閣府 男女共同参画推進連携会議 上智大学（学校法人上智学院 男女共同参画推進室）（公社）ガールスカウト日本連盟 （一社）ジャパンダイバーシティネットワーク （公財）ボーイスカウト日本連盟 〈認定〉NPO法人国連ウィメン日本協会

このシンポジウムは国際女性会議「WAW2016」公式サイドイベントとして登録しました。

会員団体の紹介

正会員団体 群馬婦友会

会長 長京子

群馬県は、1980年より「婦人国外研修事業」を実施し2009年まで継続しました。第一回は、群馬県内の女性を、中国の全女性で組織されている中華全国婦女連合会を通して「中国の女性との交流を図り、女性の生き方・文化・教育・産業等を学ぶ」という目的で50名が中国へ派遣され、同年、研修で培った感動・想い・貴重な体験をもとに群馬婦友会は設立されました。研修で培った知識と経験を広く地域社会や職域へ普及浸透させることを会の目的として活動を続けて、今年で35周年を迎えます。

現在、群馬婦友会の事業目的として「男女共同参画推進」・「国際的視点をもって地域で活躍できる女性リーダーの育成」等があります。平成15年に「世界に目を開く一開発途上国の女性の幸せのために」という講演会を実施し、当時の日本国内委員会の理事長であった安陪陽子氏から国連ウィメン日本協会の活動目標と方針を伺いました。開発途上国に根強く続く貧困・差別・暴力と紛争・エイズの蔓延など、厳しい状況に置かれている女性のことを知りました。私たちは国連ウィメン日本協会の活動に強く共感し、平成17年正会員として登録させていただきました。その後、「アフガン零年」の映画会、またエイボン・女性のエンパワメント・ブレスレット基金の助成金をいただき、シンポジウム「女性に対する暴力にNO！と言おう」の開催を実施することができました。高齢化による会員減少という課題もありますが、「共に幸せに生きる」という大きな目標に向かって微力ではありますが、国連ウィメン日本協会の正会員団体として活動を続けていかなければならないと思っています。

協力協定団体の活動

国連ウィメン日本協会 北九州

7月2日(土)に北九州市立男女共同参画センター・ムーブ1階の交流広場でチャリティバザーを行いました。バザーの品物は、国連ウィメン日本協会北九州に参加している団体や個人の方からご提供いただいています。毎年このバザーを楽しみにしている方も多く、当日は多くの市民の皆さんで賑わいました。

また、7月23日(土)に“男女平等と女性のエンパワーメントをめざして「私」でいこう!”をテーマに、全日本おばちゃん党代表代行(大阪国際大学准教授)谷口真由美さんの講演会を行いました。

講演後には会場から質問や意見があり、充実した講演会となりました。来場した多くの方に大変好評で、「私でいこう!」と心で唱えながら会場を後にされたことと思います。

事務局 西岡真弓



バザーの様子

国連ウィメン日本協会 大阪

11月12日(土)、クレオ大阪中央にて全国女性会館協議会第60回全国大会in大阪が開催され、国連ウィメン日本協会大阪として協賛しPRの機会を得ました。作家玉岡かおるさんによる基調講演の開始前には、エマ・ワトソンUN Women親善大使による国連本部で開催されたHeForSheキャンペーン発表会スピーチの様子を上映し、全国の女性センターから集まる職員の方々たちに見ていただくことができました。



また、ブース出展では、チラシの配布や募金活動も行いました。ブースに立ち寄った方々の中には、協力協定団体の活動に関わっている方もいらっしゃり、情報交換の機会になるなど、私たちの活動について知っていただくことができました。

事務局 岸上真巳

国連ウィメン日本協会 堺

堺では、正会員の堺市女性団体協議会が主催、国連ウィメン日本協会堺が共催し、毎年7月初旬に、第二次世界大戦で焼け野原と化した堺大空襲の犠牲者を悼み、二度と戦争を繰り返さないという信念のもと「国際女性平和フォーラム」を開催しています。43回目を迎える今年は、南アフリカ共和国駐日特命全権大使ベリル・ローズ・シスル閣下を招致し、「女性と平和」～ネルソンマンデラ大統領の遺志をつないで～をテーマに講演会を開催。あらゆる人種の女性たちが平等な権利を獲得するまでの壮絶な歴史を学び、「自由・平等・平和」の尊さを再確認しました。

また、11月には、セーフシティプログラムを実践する堺をUN Women本部のローラ・カボビアンコさんが視察に来られ、女性解放運動の拠点となった堺市立女性センターも訪問され、子どもから高齢者まで幅広く市民が歓迎のセレモニーを行いました。



国連ウィメン日本協会 多摩

7、8、10、11月の4か月、5つのイベント、そして12月にもう一つイベントがあります。協力いただけるミュージシャンが増えてきて、いろいろなプログラムが組めるようになりました。また、ご協力いただけるお店が増え、私たちの行動半径も広がり、同時にチケット販売も忙しく、がんばりすぎたかな?とも思える4か月でした。でも今まで私たちの活動を知らなかった多くの方々に国連ウィメンの活動を知っていただけたことが、なによりでした。



しかし、会員増にはなかなかつながらないのが、悩みです。新しい地域に出ていけたことにより、少しでも役に立ててもらえるならと、グッズを買い求めてくださる方が多く、また以前求められて、リピーターになる方が多いのも嬉しく、ご協力いただいた方々、頑張った会員皆さんに感謝しつつ後一つ頑張ります。

(文責) 小川裕未

国連ウィメン日本協会 よこはま

5月、スポットボランティアシステムを開始。これは会員になる前のお試しの体験、短期のボランティア活動の機会を提供するもの。6月、横浜ブランド「トモココottonハウス」を立ち上げ、長年、ショップに寄与してくださっていた牛田智子さんを囲むお礼の会をもつ。この度、会社を閉じることになり、たくさんの品物のご寄付を頂きました。9月のセミナーでは、JICA国際協力専門員の田中由美子氏による「JICAの活動から見るジェンダーと開発」をワークショップ形式にて学習。10月、横浜市内各地の地域バザーに参加。明治学院大学の社会貢献プログラムで学生を受け入れ、当団体の活動を理解してもらいながら祭りバザーの手伝いをしていただく。11月、チャリティコンサートは、森ミドリ「心をつなぐ温もりのコンサート」～小春日和～と題し、究極の癒しの楽器チェレスタを中心とした演奏。外は11月にしては珍しい初雪、しかしそれとは裏腹に会場内は癒しの演奏でまさに温もりの小春日和でした。

会長 樽谷文代



国連ウィメン日本協会 東京

9月と11月に連続講座を開催、「文学とジェンダー」と題し英作家ヴァージニア・ウルフの研究者窪田憲子氏をお招きしました。第1回「作家ヴァージニア・ウルフの全体像を生きた時代との関連で考える」では、「意識の流れ」の作家・内的心理の探究者・フェミニズムの守護者としてのウルフについて。第2回「ヴァージニア・ウルフと戦争—2度の世界大戦を経験して」では、戦争はナショナリズムのぶつかり合いであるとのウルフの平和観を学びました。

12月8日には「朗読コンサート：ピアノのしらべにのせて～美しい日本語を読む」を開催、都指定有形文化財である求道会館を会場に、朗読とピアノによる初冬の午後を楽しみました。



国連ウィメン日本協会 さくら

9月、「さくら」で世界共通目標「SDGs」の勉強会を開催しました。

11月20日～28日で訪日されていたレツィエ3世・レソト国王王妃両陛下。東北被災地の視察の折、さくらからマセナテ王妃陛下へ、レソト王国の女性等へのプレゼントとして鉛筆1000本と消しゴム50セット以上の文房具類を一冊の会と共催して贈呈いたしました。国の発展のためには教育が大事であるとお考えの王妃陛下と、国連の掲げる「持続可能な開発目標（SDGs）」の1項目である「質の高い教育をみんなに」を共通目標として、これからも支援を続けていきます。

国連ウィメン日本協会さくら



事務局からの報告

■マンスリー寄付のお願い(個人の方のご寄付)

個人の方のご寄付では、インターネットを通じて、毎月定額を継続しての寄付(マンスリー寄付)ができます。一回手続きをしていただければ、毎月定額を継続して寄付していただくことができる仕組みです。

金額は、1,000円/月、2,000円/月、3,000円/月、5,000円/月の4つのコースから選ぶことができます。国連ウィメン日本協会ホームページの「今すぐ寄付」からアクセスをお願いします。

■2017年総会・協力協定団体ネットワーク会議開催のお知らせ

日時 2017年2月25日(土) 13:00~16:30

会場 婦選会館 多目的ホール

総会 13:00~14:20

主な議題

2016年度活動報告、活動計算書(案)

2017年度活動計画、活動予算書(案)

ネットワーク会議 14:30~16:30

主な内容

協力協定団体からの活動報告

■寄付者一覧(前回掲載以降2016.12.28現在)

ブックオフコーポレーション(株) 讃井暢子 大塚享子 齋藤京子 榎山敦久・幸恵 岡島敦子 竹崎裕子 ビューティショップK 鹿野京子 酒井真喜子 高橋克子 石橋三洋 衛藤栄津子 全国友の会 船橋邦子 竹本和永 森真理子 吉良彩希 鷺見八重子 原庸一朗 藤原康洋 本田敏江 佐藤想子 (株)ソシア 山田メユミ 国連ウィメン日本協会よこはま

■ブックオフ宅本便寄付(前回掲載以降2016.12.28現在)

内藤美保 石黒直子 国連ウィメン日本協会よこはま 竹本和永 加藤美和子 山本素 村松泰子 大阪Iゾン

タクラブ中務和美 山本恵 平野和子 佐賀奈穂 重千富 矢部万紀子 高野祥子 八木さよ子 花沢民江 オカイイクヨ 小滝和子 中島その 上岡美代子 甲斐悠紀子 栗崎淳子 三木節子 大塚恒穂 延江浩 谷口京子 渡邊美恵子 上田八重子 山内啓子 藤井礼子 鈴木恵実子 横尾裕紀子 浅野千恵子 芦田清子 山田清子 青山通江 風間美姫子 小中啓子 阿童靖代 後藤美恵子 津秋千里

■(株)高島屋のユアチョイスギフトカタログによる寄付

■正会員団体18団体(前回掲載以降2016.12.28現在)

〈団体〉(公財)アジア女性交流・研究フォーラム NPO 法人一冊の会 (一財)大阪市男女共同参画のまち創生協会 群馬婦友会 国際婦人年連絡会 堺市女性団体協議会 全国友の会 国連ウィメン日本協会堺 国連ウィメン日本協会さくら 国連ウィメン日本協会多摩 国連ウィメン日本協会東京 国連ウィメン日本協会よこはま (公財)横浜市男女共同参画推進協会 国際ゾント26地区 (一社)大学女性協会

〈企業〉イオン1%クラブ (株)高島屋 日本たばこ産業(株)

■正会員個人40名(前回掲載以降2016.12.28現在)

■賛助団体14団体(前回掲載以降2016.12.28現在)

〈団体〉久留米市男女平等推進センター (一社)国際女性教育振興会茨城県支部 越谷ミズの会 (公財)せんだい男女共同参画財団 にいがた女性会議 日本生活協同組合連合会 (公財)佐賀県女性と生涯学習財団 NPO法人トルコ文化交流会 国際ゾント姫路ゾントクラブ

〈企業〉(株)グッドバンカー (株)電通 (株)リコー (株)フジテレビジョン (株)クロスメディア・ランゲージ

■賛助個人134名(前回掲載以降2016.12.28現在)

鈴木千鶴子 谷聖子 船橋邦子 矢島千里 岩井紘子

<認定>NPO法人国連ウィメン日本協会

事務局

〒244-0816 横浜市戸塚区上倉田町435-1

男女共同参画センター横浜内(フォーラム)

・TEL.FAX. 045-869-6787

・E-mail unwomennihon@adagio.ocn.ne.jp

・ホームページ <http://www.unwomen-nc.jp>

●交通のご案内 JR・横浜市営地下鉄「戸塚駅」下車、徒歩7分

